

草画帖



第十六帖 露草号



露草の明日の青を摘んでくる



小さきものの青い心象が世界に灯る。



青い星の、青い花、青い人。



露草の露のころころ、青い笑いが弾ける。



紙に染み込ませた去年の青を水で溶いて彩色。

野葡萄

野葡萄は思う

あんなに星の色が

あか

あお

むらさき

みどり

とあるのは

虫がいるのだろうか

夜になると

星を見ると

なぜだか泣きたくなるよ

露草

この秋は

寝坊で

露草の青を

たっぷり見ないまま

その分

夜に

天の川原で

露草のような

星の燦きに染まっている



目の覚めるような露草の青い色も、やがては淡く…



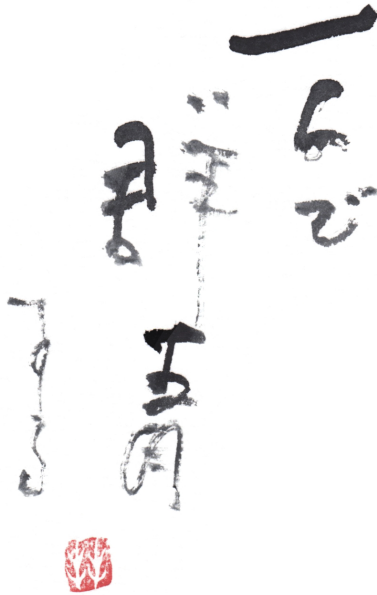
美しい雑草はわが方寸にも生える。



花びらを摺りつけた方が色が残るようだ。



露草に染められた心は、うすれても色は落ちない。



わたしという淋しき青のパークッション！

草話

昔、一度だけ歌仙を巻いたことがある。その巻頭、

露草の軒端涼しき哀愁館 醉生虫

皿 一枚に豆腐半丁 艸々子

古家の軒に咲いていた露草を愛でて挨拶としてくれた。それに豆腐でもてなした。皿に一丁盛らなかつたのは、亭主のあるがままの貧しさ。皿は、露草の青を受けての染付。

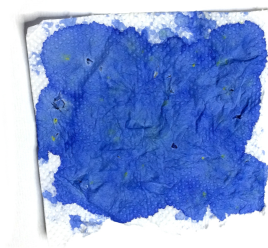
*

染付と言えば、友人（陶芸家）の契めで皿や徳利や盃にいろいろ描かせてもらった。紙に墨で描くのと土に呉須で描くのとは勝手は違ふけれど、モノクロームの余白を生かした世界という仕上がりは同じ。染付はもっともしくりくる基本的なふうら色でもある。

*

露草は古代から染色に使われた馴染みの花で、付草、青花、染草、絵具花などの古名通名があり、紺屋太郎と呼ぶ地方もある。

秋になったら露草で描きたくなる。そうなるとやはりあの青を遊びたくなる。あの青に染まって、皿に豆腐半丁の染付のような暮らしたいくなる。



露草の青

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第16号 2019年9月10日 泉井小太郎編集 六角文庫発行

〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008